



あぶない誘惑ビーチ

ビキニ女子大生の童貞指南

早瀬真人

挿絵／匿名ヒーロー

立ち読み版

KTC
KILL TIME COMMUNICATION



第一章	お姉さんたちの童貞検査……………	4
第二章	憧れのお姉さんのピキニ艶姿……………	51
第三章	巨尻お姉さんとの恍惚初体験……………	94
第四章	巨乳お姉さんのサンオイルパイズリ……………	148
第五章	二人のお姉さんの乱交淫ら奉仕……………	198
第六章	憧れのお姉さんとの初体験……………	246

登場人物

Characters

志田 優香

(しだ ゆうか)

聖淑女子大学の三年生。慎吾の中学時代の家庭教師で、彼の憧れの女性。透明感のある清楚系のお姉様ながら時折さばけた一面も見える。

増村 亜紀

(ますむら あき)

優香と同じ大学に通う同級生。セミショートの猫の目、小麦色の肌をした女豹タイプの女性。三人組のリーダー的存在。

佐伯 恵美

(さえき めぐみ)

優香と同じ大学に通う同級生。セミロングのベビーフェイスで、顔とは裏腹の爆乳がチャームポイント。

金村 慎吾

(かねむら しんご)

気弱で引っ込み思案な高校二年生。ただ、性的好奇心は人一倍強い。



「いやあん、恥ずかしい！」

恵美がうれしそうに奇声をあげ、頬に両手を当てながらいやいやをする。

二人の様子を見た限りでは、恋愛指南というよりも、自分たちも存分に楽しんでいくかのようだ。

亜紀の手を借りてゆっくり立ち上がると、慎吾はふらつきながら、ソファアの側へと連れていかれた。

「ソファアの前の絨毯に座って」

「え？　ここですか？」

「そう。ソファアに向き合うような形で」

言われるがまま正座をすると、亜紀と恵美が目配せをし、恵美一人だけが浴衣を脱ぎ捨てていく。

「まずは私からね」

蛍光灯の明るい光の下、今にもこぼれ落ちてきそうな恵美の爆乳は、やはり壯観のひとつに尽きた。パイパン状態の恥丘がこんもりと盛り上がり、いやが上にも男の股間をピンピンと刺激してくる。

次に恵美は妖しい笑みを湛えながらソファアへと腰掛け、慎吾の眼前で両足を徐々

に左右に開脚していった。

(あああああ)

目の前を遮るものは何もない。今慎吾の目の先、わずか三十センチ前に女性器があられもなく曝け出されているのだ。しかも恵美はすべての陰毛を剃り落としていたため、その構造を余すことなく見せつけていた。

「やああん、恥ずかしいよ」

恵美は両手で顔を覆い、両足を小さくバタつかせる。

「何が恥ずかしいよ。乳首なんか、もう勃っちゃってるくせに。ほんとに恵美はどスケベなんだから」

亜紀が小さな声で独り言のように呟き、慎吾のとなりへ腰を落としてくる。

「ほら、これがおマ○コよ。じっくりと見るのは初めて？」

亜紀の言葉が耳に届かないほど、慎吾は恵美の秘芯を真剣な眼差しで凝視していた。股間の中央にぱつくりと開いた割れ目は、まるで大きな唇を縦にしたかのような小陰唇がその存在感を誇るように突き出ている。

ややくすんだ色の二本の肉帯は思っていた以上に厚く、外側に向かって捲れ上がっていたが、下方に向かうに連れて細くなり、まるで巻き込むように膣口の内側へと続

いていた。

淫裂の上方に位置するのが陰核だろうか、尖った卵形の物体を隠すように肉の鞘で覆われている。

「そう。そこにクリトリスがあるのよ。さつき、私のを触ったからわかるでしょ？」
亜紀の言葉に、慎吾はコクリと頷いた。

薄い肉の壁が砲弾状に盛り上がり、小さな肉粒を囲むように包み込んでいる。

亜紀が左手の親指を伸ばし、陰核の上側の皮膚をキュッと押し上げると、包皮が剥き上がり、半透明の肉芽がちよこんとその顔を覗かせた。

（あ、クリトリスって、こんなに小さいんだ。ツヤツヤと輝いてて、しこってはいるようだけど、なんかクニクニしてて柔らかそうだ）

探究心に目覚めた慎吾は、次にその真下のやや口を開いた肉の切れ込みへと視線を移した。

赤桃色の内粘膜はしっとり濡れ、その奥には肉の尾根が複雑に連なり合っている。恵美と交わったときに感じたことだが、やはり膣の入り口はかなり狭いようだ。

慎吾がさらに顔を近づけると、恵美は自ら両足を抱え上げ、M字開脚の姿勢を取った。

（あつ。中まで丸見えだ！）

「いやん！ 恥ずかしい。慎吾君、そんなに見つめないで」

恵美はそう言いながら顔を横に背ける。

「まったく何言ってるの。見つめないでもないもんだわ。自分からおっぴろげておいて」

亜紀の呆れ顔を尻目に、慎吾は眼前に開かれた淫裂を覗き見た。

ぶつくりとした女肉がひくつき、それは幾重にも折り重なり合っているように見えたが、いちごミルクの彩りいろどはいかにも粘膜という形容詞がびつたりの色合いだ。

その隙間からは半透明の愛液がジユクジユクと溢れ出し、まるで玲瓏れいろうな肉花を咲かせているかのようだった。

亜紀が両指を伸ばし、秘裂を左右に押し広げる。

「あん、亜紀。だめえ」

「いいからじつとしてなさいよ。どうせ、こんなに濡らしちゃってるんだから。ほら慎吾君、わかる？ ここがおしつこの穴よ」

淫口の上方には肉の垂れ幕が見て取れたが、その中心部には確かに吸盤のような小さな穴がひくついていた。

(女の人の穴は二つあるって聞いていたけど、こんな作りになっていたのか)

女陰をまじまじ見つめてみると、胸が締めつけられるように苦しくなってくる。

恵美も昂奮しているのか、すでに肉洞からはとろりとした愛液が滴り落ちていたが、淫靡な匂いが鼻先に漂ってくると、ペニスはまるで条件反射のように激しくいなないた。

(ああ、触ってみたい。舐めたいよお)

苦渋の顔つきをする慎吾の心境を察したのか、亜紀が誘いの言葉をかけてくる。

「ふふ。慎吾君の好きなようにしたら」

言い終わるか終わらないうちに、慎吾は鼻息を荒らげながら指先を恵美の花弁へと伸ばしていた。

「あっ……んっ」

右人差し指でクリットをツンと突くと、恵美が小さな喘ぎをあげる。その様子を手取りと上目遣いで窺いながら、慎吾は親指でクリクリと左右に爪弾いた。

「ふ……うん。優香はね、耳や首筋も性感帯らしいけど、クリトリスが一番感じるんだって。そうやってたっぷりと弄ってあげると、すごく喜ぶと思う」

答える恵美の声はすでに上ずり、吐息混じりになっている。慎吾はさらに左指で二

本の濡れ羽をなぞりあげ、内粘膜へと這わせた。

「ひっ」

内股が引き攣り、鼠蹊部が小刻みな痙攣を見せる。粘膜のフリルの狭間から、さらなる愛液が溢れ出してくる。

指を動かすたびに恵美は腰を小さくバウンドさせ、その反応見たさに、慎吾は夢中になって舟状の割り開きを蹂躪じゅうりんしていった。

「はふん、いやん。はああ」

「慎吾君、うまいわあ。最初はそうやって、ゆっくりと丁寧に。指を入れて、徐々に激しくしていくのよ。それから女の子のいや、だめは感じる場所の裏返しだからね」
亜紀のレクチャーを受け、右手の中指を膣口に挿入する。

膣内粘膜がうねりながら指を締めつけてくると、慎吾は唇を真一文字に結んだ。
「性感ポイントはね、上のほうにある梅干し大のしこりよ。そこを小さく回転させるように揉みほぐすの」

指腹で膣の上部を探っていると、確かに小さな盛り上がりを示している箇所がある。これがGスポットというものなのだろうか。

慎吾は言われるがまま、指をしこりに押し当てると、ゆっくりと擦り回した。

「あ……あ。だ、だめ」

よほど気持ちがいいのか、恵美は今度は豊満な乳房を波立たせ、上半身をビクビクと引き攣らせる。

指の回転を徐々に速めていくと、太股がギュッと狭まり、恵美は下唇を噛み締めながら眉間にくつきりとした縦皺を寄せていった。

再びクンクンと、ヒップが小刻みなバウンドを見せる。その直後、恵美がソファの背もたれに背中を預けたかと思うと、淫裂からピュッピュッと水しぶきを噴き出させた。

「いやだわ。潮なんか吹いちちゃって。でも慎吾君、すごいよ。指だけでいかせちゃったんだから」

「ぼ、僕が？」

「そうよ。恵美を見てごらんさい」

先ほどまで苦悶に近い表情をしていた恵美は、憑き物でも落ちたかのような清々しい顔をしている。その恍惚とした顔つきは、まるで天国を彷徨っているかのようにだった。

（僕が……恵美さんをいかせた？）

その事実が一概に信じられない。数日前まで童貞喪失を夢見る少年は、女を絶頂に導くどころか、悶々とした日々を送っていたのである。

「もう一人前の大人の男性ね。大きな自信になったんじゃない？」

亜紀の褒め言葉を囁み締め、ようやくじわじわと感激が込み上げてきたその刹那、恵美がうつすらと目を開け、虚ろな視線を向けてきた。

さすがに気恥ずかしくも、慎吾がはにかみ顔で応えると、突然恵美がソファから下りてくる。

（あっ！）と思った瞬間、慎吾は絨毯の上に仰向けに組みしかれていた。

「もう、あんなことされたら、我慢できなくなっちゃう」

「ちよつと、恵美！ 本番はだめよ」

「わかつてる。素股ですればいいでしょ？」

「私だって、まだ目一杯楽しんでないんだからあ」

「あ、あの、ちよつと……」

突然の展開に泡喰う慎吾を尻目に、帯を解いた亜紀が顔を跨いでくる。浴衣の合わせ目をはだけさせ、髪を振り乱しながら迫ってくる姿はやはり女豹そのもの。

ぱつくりと開いた割れ口は、すでに二枚の花弁が捲れ上がり、デリケートな内粘膜

をこれでもかと見せつけていた。

ピンクパールの肉芽はすでに包皮から顔を出し、鮮桃色の内粘膜からは匂い立つ泉がしとどに溢れ出している。

やはり身体が恵美よりも大きいせいだろうか。全体的に大振りで、そこは色艶もややセピアがかったいた。

「慎吾君、私のを舐めて」

亜紀は両足を限界まで左右に開き、股間を鼻と口に押しつけてくる。

慎吾はまるでそれが使命かのように、舌をグイッと突き出したが、同時に股間に甘美な電流が走り抜けた。

どうやら恵美が、再び口唇愛撫を開始したようだ。

生温かい口腔粘膜にペニスが含まれた感触、肉幹を唇でしごかれる悦楽に腰がぶるつと震えてしまう。

慎吾はその感覚を享受しつつ、眼前の秘芯を舌で舐っていった。

「はぁん。そう、いいわ。いい」

でっぷりと脂肪の詰まった肉厚のヒップがくねり、小さな回転を始める。その動きに合わせるかのようにクリットを突き、内粘膜に舌を這わせていた慎吾だったが、亜

紀が徐々に激しい動きを見せはじめると、息継ぎをすることさえまもなくなくなった。奇妙な果実の味を舌の上でたっぷりと味わいながらも、ヌメった愛液で鼻と口はびしょ濡れの状態。

初めて経験するクンニリングスに舌を乱舞させるも、亜紀は回転に加えて前後動と巨尻を揺すぶり回していく。しかもペニスを頬張る恵美も顔を打ち振り、激しい律動で苛烈な刺激を与えてくるのだから堪らない。

二回の放出があるとはいえ、二人のグラマラスな女性から受ける奉仕に、慎吾の性感も徐々に極限まで追いつめられていった。

「はああああん、いい！ 気持ちいい！」

「んっ！ んふっ！」

高らかな亜紀の嬌声、怒張を舐る恵美の吐息。ヌチュニチャ、ピチュクチュと、前から後ろから粘膜の擦れる猥音が鳴り響いてくる。

「もう、だめっ」

恵美が嘆息に近い喘ぎをあげ、腰の上を跨がってきた瞬間、ペニスに強烈な快感電流が走り抜けた。

「あつ、くっ！」

裏茎全体が、柔肉の感触とねっとりした生温かいヌメリに包み込まれる。どうやら恵美は、秘芯を肉筒に押し当ててているようだ。

「やん！ 気持ちいい」

腰の前後動が始まると、快感はさらに増幅し、慎吾は思わず下唇を噛み締めた。

愛液で濡れそぼった二本の肉びらが、肉筒を挟み込むように摩擦していく。包皮が蛇腹のようにスライドし、雁首を強烈に擦りあげていく。

その様子を肩越しで見っていた亜紀は、浴衣をたくし上げながら身体を反転させ、逆向きの体勢で再び腰を落とした。

今にもはち切れそうな豊臀が、凄まじい迫力で迫ってくる。

（うわっ！ すごいお尻っ！）

思わず目を剥いた慎吾だったが、股間に生じた新たな快楽に、すぐさま双眸を固く閉じた。

亜紀が亀頭の先端を指で弄り、再び淫裂を鼻先に押し当ててきたのだ。

「はふん、あはん」

「うん、すごい。おチンチンの先っぽがもうはち切れそう」

恵美の花弁が肉胴を押しひしゃげるようにスライドし、亜紀が雁首を指でなぞりな



がらまん丸のヒップを慎吾の口元にぬめつける。こなれた内粘膜から放たれた媚臭を嗅ぎながら、鼻先に押し出されたクリトリスを舌先で掃き廻る。

クンニリングスに集中することで、何とか射精感をやり過ぎそうにも、下腹部を襲う淫楽の熱波は徐々に慎吾の脳髓を蕩けさせていった。

「やぁん。クリちゃん当たって気持ちいい！」

「慎吾君、舌をもっと上下に動かして。そう、あぁん」

発情した二匹の牝猫の喘ぎがシンクロし、熱化した空気とともに淫らな雰囲気は拍車をかけていく。

亜紀と恵美の豊満な肉体は汗でぬたつき、艶のある煌めきを発していた。

風船のように膨らんだ股間の悦楽は、やがて限界ぎりぎりまで張り詰め、ただひたすら射精の瞬間を訴える。

「ん……んぐっ。も、もう」

腰のひくつきとともに、慎吾の口元から断末魔の呻きが放たれ、それを合図としたかのように、亜紀と恵美のヒップの動きも熾烈さを極めていった。

桃色の突き出た恥唇が、裏茎を凄まじい速さで往復していく。柔らかな指先が、まるで樹液を搾り取るように先端の肉実をこね回す。

やがて官能の深淵に追いつめられた慎吾は、毛穴を粟立たせながら絶頂の訪れを告げた。

「いふつ、いふううううううう!!」

全身から汗を迸らせ、雷にでも打たれたかのように総身を震えさせる。

慎吾は筋肉の硬直を自ら解き放つと、深奥部に残るありったけの欲望のエネルギーを放出させた。

「きやあああん」

「いやあ。すごい！ 三回目なのに、何この量!!」

亜紀と恵美は奇声を発しながらも、恥肉と指でペニスを懸命にしごきたてている。

白濁の熱水が腹に降り注いでいる感触を受けながら、慎吾は視線を虚空に据えたまま、むせぶように打ち震えていた。

裏返るような嬌声をあげ、優香の上半身が仰け反る。舌先でクリ豆を引き転がしたあと、唇を窄めながらチュッチュッと吸い上げると、優香は内股を激しく痙攣させた。「あつ、そこはいやつ……感じる、感じるのお。いやああ！」

ヒップがクンクンと浮き上がり、恥部一帯に熱い空気が立ちこめる。シーツを引き絞るように手繰り寄せ、全身にうつすらと汗の皮膜を纏わせる。

その様子を上目遣いに見つめながら、慎吾はひたすら舌の動きに専念した。ときには秘豆をこそぐのように掃き廻り、ときには反動をつけながら舌の裏側で打ち叩く。

そのたびに優香は様々な反応を見せていったが、男の本能がそうさせているのか、慎吾は実践で女が喜ぶ愛撫を自ら学習していった。

「慎吾君、どこでそんな……ンっ！」

口戯を続けながら右手の中指を膣内に挿入させると、優香の鼠蹊部がピクンと震え、膣口が収縮を見せる。

慎吾は肉襞の強烈な締めつけに怯むこともなく、指を回転させるように、Gスポットをやんわりと刺激した。

「き……気持ちいい。気持ちいいわあ」

優香は快楽に翻弄ほんろうされているのか、ツンツンとヒップを何度も浮かせてくる。やが

て慎吾は肉豆を口中に引き込み、さらなる強い吸引をしながら指の動きを徐々に速めていった。

「あ……あ……あ。そ、そんなこと……したら」

優香の喘ぎが途切れがちになり、全身の筋肉が硬直を見せはじめる。形のいい顎を天井に向け、腰をひくひくと痙攣させる。

慎吾はなおも口唇愛撫と指での抽送を続けていったが、いつの間にか優香がまったく無反応なことに眉をひそめた。

嬌声をあげることはおろか、まるで死んだようにピクリとも動かない。

(あれ?)

慎吾は顔をあげると、心配そうに優香の顔を覗き込んだ。

双眸をしっかりと閉じ、形のいい唇は真一文字に結ばれている。それまでの切なげな表情はすっかり鳴りを潜め、まるで天国にいるかのような安らかな顔を見せていた。

「優香先生？」

這い昇るように顔を寄せた慎吾に、ようやく優香はうつすらと目を開ける。

その瞳はしつとりと潤み、何かを訴えかけてくるような眼差しは、これまでに見せたことのない艶っぽい表情だ。

「……いかされちゃった」

恥ずかしそうに呟く優香を、慎吾は呆然と見つめた。

亜紀や恵美は身悶えながら咆哮し、絶頂の瞬間を自ら口にしていたが、優香の場合にはあまりにも静かすぎて、まったくわからなかったのである。

(あそこの形や色もそうだけど、女の人ってやっぱりいろいろ違うんだなあ)

目を点にさせながら見つめる慎吾に、優香は恥じらしいの微笑を送っていたが、突然甘く睨みつけながら言い放った。

「ひどいわ。自分だけ楽しんで」

そう告げると、上半身を起こしながら慎吾を押し倒し、下方へと身体を移動させる。エレガントな顔立ちが股間へ近づいてくると、慎吾は歓喜に打ち震えた。

(フェラチオだ！)

亜紀や恵美のときもそれなりの満足感を抱いたが、やはり優香では期待感が圧倒的に違う。

「慎吾君のおチンチン、すごく大きくて逞しい。先っぽから、透明なお汁がたくさん出ちゃってるよ」

「ああ、優香先生。そんなエッチなこと言わないでください」

「だめっ。さつきは私のこと、散々苛めたでしょ。慎吾君のおチンチン、ふやけるまでしゃぶっちゃうんだから」

「ああ」

慎吾は眉を切なそうに下げ、自らの股間を見下ろした。

透明感のある優美な表情がどこか物憂げに変化し、男根に向かって優香が唇を擦り寄せていく。

口唇奉仕の光景を思い浮かべた慎吾は、ペニスを激しく疼かせていた。

猛り狂った肉塊を頬張る女の姿は、いつ見ても淫蕩的なものだ。相手が憧れ続けた女性なら、なおさらのことである。

優香は根元に指を絡ませ、亀頭の先端に軽いキスを見舞うと、舌尖でチロチロと突き、やがて裏茎に唇と舌を這わせていった。

「はうっ！」

くすぐったいような感覚が肉筒に走り、思わず呻き声が放たれてしまう。

怒張の量感を確かめるように、優香はしばしソフトな愛撫を加えていたが、瞳を閉じると口を半開きにさせ、今にもはち切れんばかりの肉槍を呑み込んでいった。

クポッという唾液の跳ね上がる音とともに、節ばった牡のシャフトがみるみるうち

に喉奥へと埋没していく。

再び口から抜き取られたペニスは唾液で妖しく濡れ光り、さらに圧倒的な威容を誇っているかのようだった。

優香が頭をスライドさせ、ゆったりとした抽送を始める。

舌を肉幹に絡ませ、肉胴を上下の唇で磨きあげるかのようになり、ねっとりとした丁寧な口唇奉仕は、慎吾の性感を煌めく夢の世界へと連れていった。

亜紀や恵美の激しいフェラチオも気持ちにはよかったが、あちらが怒濤のような荒波なら、こちらは清流のような緩やかな流れの中にいるようだ。

自らの肢体に受け入れる男の証を、存分に慈しんでいるような、愛情に近い情感を覚えてしまう。

二人の間には流れる至福の悦楽に浸りながら、たっぷりと時間をかけ、慎吾の射精願望は頂点へと導かれていった。

「あ……あ。優香先生……僕、もう」

三度の射精などどこ吹く風とばかり、すでに腰には小さな痙攣が走りはじめている。慎吾が我慢の限界を伝えると、優香はペニスから唇を離し、蕩けるような視線を向

けてきた。

覆い被さるようのしかかり、騎乗位の体勢で怒張を膺の中に挿入しようとする。その頬は上気し、優香自身もこれ以上は我慢できないといった雰囲気だ。

慎吾は優香の腕にそつと手を添え、やや嘸れた声で訴えた。

「僕、上になりたいです」

その言葉には答えず、優香はそのまま慎吾の真横に仰向けになる。

（ついに、優香先生と結ばれるんだ！）

慎吾は小鼻を広げながら上半身を起こすと、優香の下腹部へと身体を移動させた。両足を開かせると、中心部はすっかりとぬかるみ、花芯も溶け崩れたように綻んでいる。慎吾は狙いを定め、亀頭の先端を濡れそぼった亀裂へと押し当てた。

「ソっ！」

優香が眉をひそめ、下唇を噛み締める。

愛液のヌメった感触とともに、口唇愛撫によつてこなれた柔襞の中へ怒張が埋め込まれていくと、慎吾は思わず感極まった。

「ぼ、僕、ついに、ついに優香先生と結ばれたんですね」

「うん。まさか慎吾君とエッチしちゃうなんて、私も夢にも思ってた」
そう言いながら、優香は慎吾の前髪を優しく掻き上げる。

天国まで駆け上るような至福の喜びを享受しながら、慎吾は前屈みになり、さらに膣奥へとペニスを送り出していった。

「あ……はああん」

尾を引くような甘い溜め息をつきながら、優香は首に両腕を絡めてくる。

慎吾は一体になった充足感をしばし満喫したあと、男らしく腰の律動を繰り返していった。

「あ、気持ちいい。気持ちいいですう」

「私も、私もよ！」

生温かい、しつとりと濡れた膣壁が肉幹を包み込み、またうねるように絡みついてくる。

亜紀のときは膣の中が広く、恵美のときは狭いという印象を覚えたが、優香の場合は余分な隙間も強烈な締めつけもなく、ぴったりと合わさっているかのようだ。

ぐっぽりと嵌まり込んだ膣肉の感触を堪能しつつ、慎吾は腰の送り出しを速めていった。

「はん……ふうん。いい、いい！ 慎吾君のおチンチンいい」

優香は鼻にかかった吐息を盛んに洩らしながら、ピストンに合わせるかのようにヒ

ッブをくねらせはじめる。

慎吾は直線的な反復運動から、時おり臀部をグリッと回転させた。その動きはまだ稚拙なものだったが、優香には十分な快感を与えたようだ。

あえかな唇の隙間から放たれる喘ぎは途切れることなく響き渡り、やがてソプラノの美声を裏返したような声へと変わっていった。

「あ、身体が蕩けちゃう。いやっ！ すごい！ すごいわ!!」

その言葉に後押しされたかのように、さらに腰のストロークを増幅させる。首に回した優香の両手に力が込められ、両足が慎吾の腰に絡みついてくる。

「ああ、イキそうです」

「イッて！ このまま私の中に出して!!」

陰茎全体にピリピリとした甘美な電流が走り抜け、臀部の筋肉がひくつきはじめる。慎吾は憧れの人の中にとりつたけの欲望の証を射出すべく、がむしゃらに腰を打ち振った。

パンパンと恥骨の当たる音が室内に鳴り響き、額から滴り落ちた汗が迸る。優香の顔も汗塗れ、火照った頬に黒髪の毛先が貼りつくほどの乱れようだ。

一条の光が脳天を貫くと、慎吾は眉間に皺を寄せながら咆哮した。



「ああああ。イク！ イクうううううううう!!」

熱水が膣奥へと迸った瞬間、まるで肉根を喰いちぎらんに膣壁がキュ〜ツと収縮する。それと同時に優香はヒップを浮かせ、まるでエンストした車のように全身をガクガクと前後動させた。

疼痛にも似た甘い痺れが、ゆつくりと全身に拡散していく。

慎吾と優香は同時に絶頂の扉を開け放つと、何度も瘧おこりのような震えを繰り返し、そのままベッドへと沈んでいった。

静まり返った部屋の中で、慎吾と優香はまどろむように、いまだ甘い名残りの中に浸っていた。

仰向けになった慎吾の胸に、優香は顔を埋めるように抱きついていてる。

慎吾のほうはといえば、まだ優香と結ばれたという実感が湧かず、惚けたような顔つきをしていた。

「ほんとはね」

「え？」

優香がふと思い出したように顔をあげ、甘えた声をかけてくる。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! 19日発売!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのパックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のお愉快的Blogも更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・cranberryをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!